

九明人の秋篠溜稿



文楽座 白梅

乍 憚 口 上

一億一心新體制を以て皆々様には愈々御緊張の御事とお喜び申上候従つて當座に於ても茲に益替り本格興行の準備を整へいよゝ職域奉公の一途に邁進いたすべく一座太夫三味線人形連中には物顔ぞろひを以て固有藝術發揚の精神に燃え大奮闘を以て御期待に添ふべき覺悟に有之尙又此度を機會にお馴染の竹本文字太夫儀は御最負皆々様のお勧めに従ひ六代目竹本住太夫と改名仕候尙豊竹小松太夫も此度復歸致し豊竹つばめ太夫と改名仕り候間之れ又一層の御引立を賜り度愴而狂言の儀はいづれも文樂座獨得秘藏の名狂言數種を配列して古典の眞髓を傳へ殊に此度日本精神の最も耀やかしく發露されたる歴史的人物を主役とせる新作曲新演出の大舞臺を組み立て御鑑賞を乞ふと共に當座獨得の使命を達成いたしたき念願に有之候間これ又宜敷御聲援の程を御願申上度以上新秋勿々皆々様への御贈物として堂々開場可致候間陸續御來觀below下成度偏に奉御願申上候

昭和十六年九月一日

四ツ橋畔

文 樂 座 敬 白

昭和十六年九月一日初日

初日午後三時開演
毎日午後三時半開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符

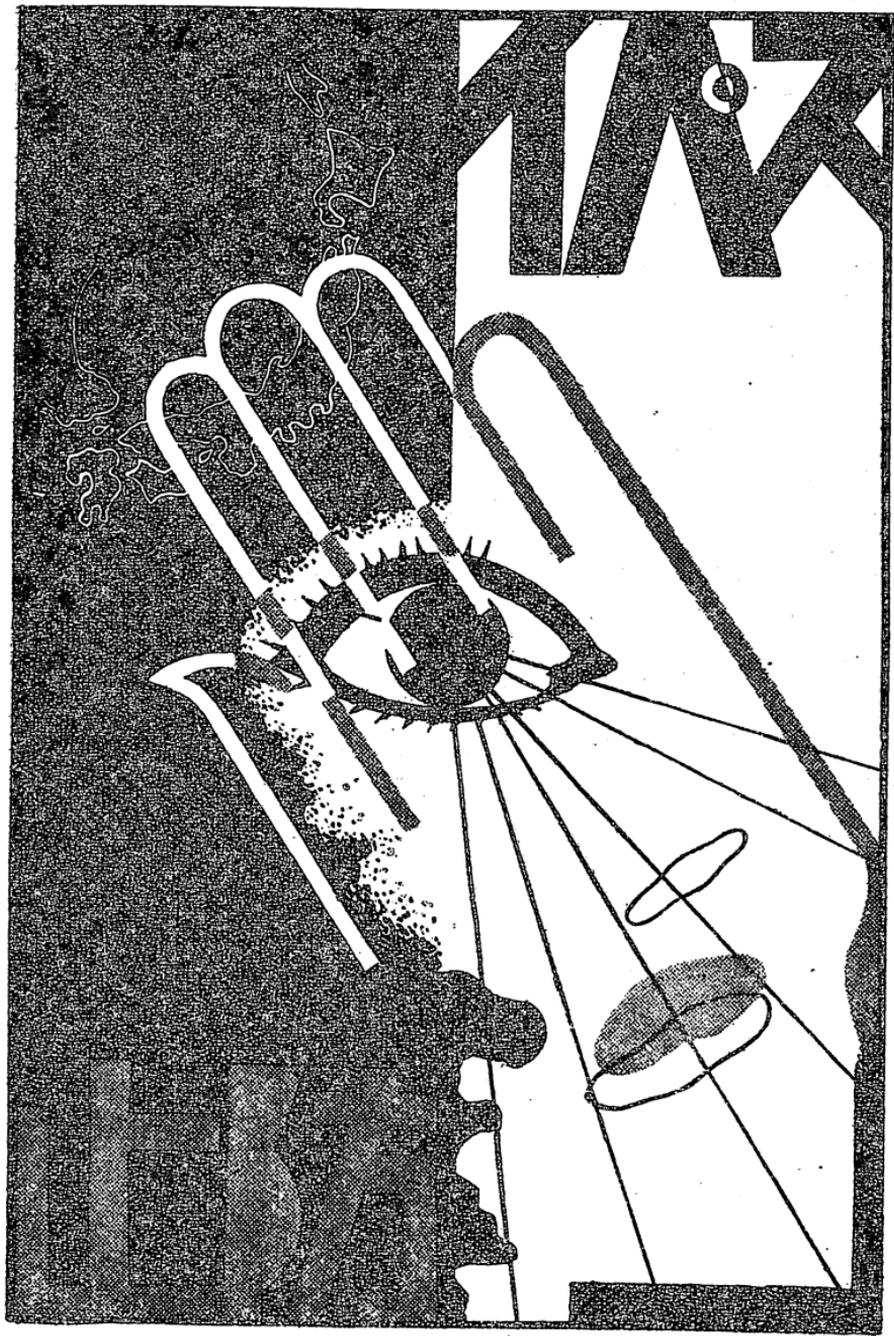
專用電話

南[㊦]四七壹番
南[㊦]三〇三二番
南[㊦]三七八八番

一般御用
の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。

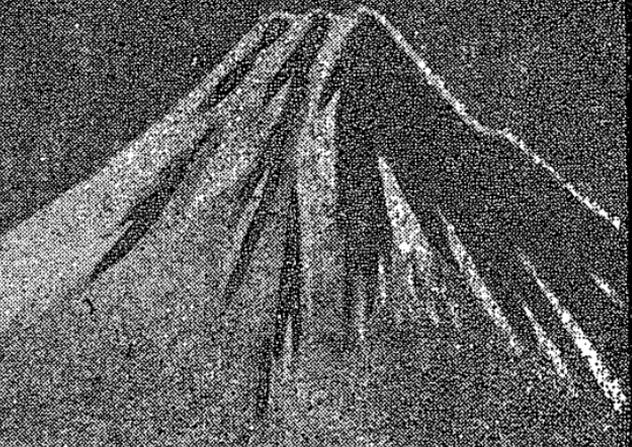
公奉域職・踐實道臣



國民精神總動員

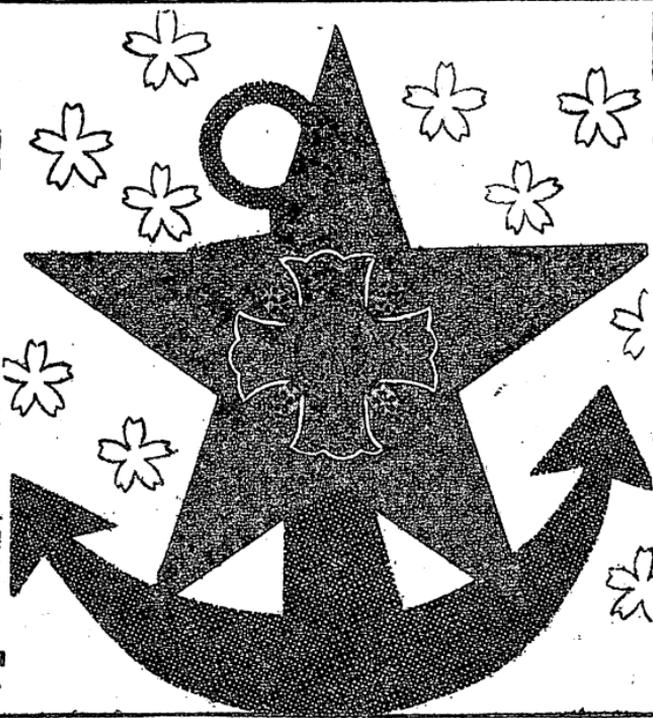
臺灣報

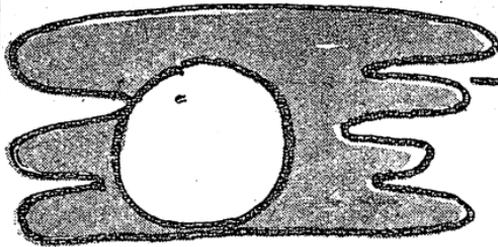
中華民國二十九年



國を護つた 傷兵護れ

傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟





の月九

人形浄瑠璃

演出總形人・練味三・夫太

初日 九月初一日
午後三時開演
初日 九月初一日
午後三時開演

第一本朝	廿四孝	狐十種香の段 火の段 まより	平沼津内里の段	第二伊賀越道中双六	紫紅山人作・鶴澤重運作曲・大塚克三舞合披露	第三名和長年	大阪湊の段 まより	第四辰駕	麻色の相肩	第五双蝶々	八幡里引窓の段	第六日	高川
------	-----	----------------------	---------	-----------	-----------------------	--------	--------------	------	-------	-------	---------	-----	----



文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して来た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がよりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。

それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本来であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

本朝 廿四孝

十種香の段より
狐火の段まで



十種香の段

娘八重垣姫 竹本南部太夫

武田勝頼 豊竹つばめ太夫
小松太夫改め

腰元濡衣 竹本雛太夫

長尾謙信 豊竹伊勢太夫
千駒太夫

白須賀六郎 竹本常子太夫
津磨太夫

原小文治 豊竹宮太夫
隅若太夫

鶴澤道八

明和三年正月(二四二六)竹本座初演。作者には近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出、竹田平七、竹本三郎兵衛等が名を列ね、全五段に分れ、殊に、第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戦を題材とした大近松作「信州川中島合戦」(享保六年八月二三八一)竹本座初演)に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉兩家の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀判を取合せた作。

梗概

武田上杉兩家は諏訪法性の兜の事から確執して居りましたが、將軍義晴の身に變事があつた爲、三年間合戦を止めて其間に曲者を探す事、若しその出来ぬ時は兩家は互に一子勝頼、景勝の首を打つて渡す事を誓ひ、三年間は無爲に過ぎました

娘八重垣姫	人形役	桐竹紋十郎	割	野澤勝芳	琴	レ	ツ	鶴澤友衛門	鶴澤伊三郎	豊澤團伊三郎	竹本七五三太夫	狐火の段	原白腰長武娘、 須元尾田八 小賀濡謙勝重 文六郎衣信賴垣 治郎	吉桐吉吉吉桐 田竹田田田竹 文紋之玉文紋 枝司助市作郎	人形役	娘八重垣姫
-------	-----	-------	---	------	---	---	---	-------	-------	--------	---------	------	---	--------------------------------------	-----	-------

此所に信玄の息勝頼ですが、彼は奸臣板倉兵部の爲に幼時より民間に育つて花作り箕作と呼ばれ瓜二つの兵部の子が勝頼と名乗つておました爲に幸に偽の勝頼が切腹し、其首が渡されたのでした然して此所長尾館に仕へる腰元で此の偽の勝頼と戀仲の濡衣は、將軍義晴を狙撃した齋藤道三の娘で、父の意をうけて武田上杉を亡さんとしてゐたのですが、戀人の死に會つて翻然、武田家の爲に上杉家から法性の兜を取り返そうと、腰元となつてゐるのです。箕作の勝頼も亦曲者詮議と幼君の守護法性の兜取戻しの爲に、花造りとなつて此の館に入りこんでゐるのです。又上杉家の息女八重垣姫は、かねて武田勝頼とは兩家和解の爲に許婚の仲で有りましたが、偽の勝頼の切腹を、一圖に眞の勝頼が切腹したものと思ひこみ、其繪姿に向つて、絶へ果てた縁を歎き悲しむのでした。

劇は此所から始ります。

姫のかうした様を見た勝頼の箕作は、そぞろ不愍の念に涙するのですが、濡衣は勝頼の姿が、我が亡き戀人と瓜二つの容姿に思はず胸とどろかせるのでした。そして似たとは愚か矢張り其ままと、其足下に泣き伏す聲に、姫も襖の隙から窺へば、正しく繪姿其ままの人が其所に居て、濡衣と言葉交して居りますので、姫は改めて濡衣に向ひ若し此箕作が其方の知る邊でも、又殿御でもないならば、戀の媒介をと頼むのでした。濡衣はそれが眞實の戀ならば、仲介せまいものでもないがと誓紙の代りに法性の兜を盗み出して貰ひたいと云ひます。姫は兜を望むとは、扱は眞の勝頼様に違ひないと、箕作に縋つて嬉し涙にくれますが、箕作はいつかな本心を明かさないのでした。爲に姫は、勝頼様でもない者に云ひ寄つたは辱しと、其場に自害して果てやうとしますので、此所に始めて眞實は明されたのでしたが、折柄謙信が現はれ箕作を使ひに出すのでした。是は疾くより箕作を

勝頼と見貫いてゐたが爲で、其後より討手の勢を向けて討んとするのでした。そして濡衣をも引立てるのでしたが、一方姫は手に入れた法性の兜に向ひ、勝頼の身安泰を一心に祈願するのでした。と怪しや忽ち狐火燃へ立ち、白狐の姿の池水に映ると見へましたが、諏訪明神の神體に等しき兜、八百八狐つきそつて守護する奇瑞に疑ひなしと覺るや、忝なや有難やと兜を捧げ、爰や彼處に燃ゆる狐火に守られて、勝頼の許に急を告げに――

(佐和利) 十種香の段

申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも楽しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕こがれ見え給ふ



(床本) 狐火の段

思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、幾重もれくる爪音は、君をもうけの奥御殿、こなたは正體涙ながらアレ〜奥の間で檢校が、諷ふ唱歌も今身の上、おいとしは勝頼様、かゝる巧みのあるぞとも、知らずはからぬ御身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても、歎いても、聞入れもなき胴慾人、娘不惑と思はずなら、お命助けて添はせてたべと、身を打伏して歎きしが、イヤ〜泣いてゐられぬ所、追手の者より先へ廻り、勝頼様に此事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖船人に渡り頼まん急がんと、小棧取手も甲斐〜しく、かけ出せしが、イヤ〜、今湖に氷張詰め、船の往來も叶はぬよし、歩路をいては女の足、なんと追手に追つかれう、知らすにも知らされず、みす〜夫を見殺しにするは、いかなる身の因果、ア、翹がほしい、羽がほしい、とんで行きたい知らせたい、逢ひたい見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはよもなるまじ、此上頼むは神佛と

床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ、此御兜は諏訪大明神より武田家へ、授け給はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へすくひ給へと、兜を取て押頂き、押頂きし佛の、もしやは人の咎んと、窺ひ下りる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつと驚き飛退しが、今のは慥に狐の姿、此の泉水に寫りしは、ハテめんようなど、どきつく胸を撫でおろし、こはくながらそろくと、さしのぞく池水に、寫るは己が影ばかり、たつた今此水に、寫つた影は狐の姿、今又見れば我が佛、幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらか、ハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にあり、有明月不思議に胸もにぎり江の池の汀にすつくりと、詠め入つて立ちたりしが、誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかはしめと聞つるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑なし、オ、それよ思ひ出したり、湖に水張詰むれば、渡り初する神の狐、其足跡を知邊にて、心安う行きこう人場、狐渡らぬ其先に渡れば、水に溺るとは、人も知つたる諏訪の湖、たとへ

狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へ、ハア、忝や難有やと、兜を取つて頭にかつげば、忽ち姿狐火の、こゝにも燃へ立ち、かしこにも、亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、諏訪の湖歩渡り、甲斐と越後の兩將と其名も今に残らん。

伊賀越道中双六

沼津里の段
平作内の段



沼津里の段

竹本大隅太夫
鶴澤清次郎
鶴澤清友花

人形役割割

吳服屋重兵衛 吉田榮三
娘お米 吉田文五郎
親平作 桐竹門造
荷持安兵衛 吉田兵次

梗概

天明三年（二四四三）四月竹本座初演。作者は近松半二、近松加作。忠臣藏、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので近松東南作「伊賀越乗掛合羽」（安永六年三月二四三七）豊竹此吉座上演の改作で、全曲は第一鶴が岡の段第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中、第五、第八と共に、この第六沼津の段が知られてゐる。

鎌倉の商人吳服屋重兵衛は旅で、沼津の近くまで来たが、荷持の安兵衛を有事で元との道へ歸した。此驛の平作といふ爺に荷物を持たしたが年取

平作内の段

文字大夫改め
竹本住太夫

野澤喜代之助

胡弓
野澤吉藏

人形役割

吳服屋重兵衛
吉田榮三

娘お米
吉田文五郎

親平作
桐竹門造

池添孫八
吉田玉徳

荷持安兵衛
吉田兵次

つてゐるので思ふにまかせぬ内、石につまづき生爪を剝した。重兵衛は所持の薬をつけて勞つて遣る所へ娘お米が來た。委細をきいて重兵衛を我家へ迎へた。平作の家は貧しいくらしであつた。重兵衛今夜は此家に泊ることになつた。夜ふけた頃お米は印籠を盗む。目さめた重兵衛は仔細を問ふと、其身は以前江戸吉原の遊女瀬川の果てとわかり、夫渡邊志津馬が不慮の怪我を救ひたいばかりに最前父の傷が即座に治つた妙薬であるから盗んだと涙ながらに詫び入る。平作は盗みをするとは何事だ。幼ない時に養子に遣つたたつた一人の兄にも濟まぬと嘆き悲しむ。重兵衛はその兄と云ふのは何者だと聞く。それは鎌倉八幡宮の氏子で幼名は平三郎、母の名は「とよ」と書いた守袋をつけてあると平作は語る。重兵衛はひしと胸に應へたがわざと名乗らず、次ぎの下りまでに石碑を建て、くれとて金子を渡して行く。

その跡には印籠と臍の緒書きが残つてゐた。



平作は我子と知り、お米は澤井股五郎が持つた印籠と知つて驚く。千本松原へ追ひ付いた平作は股五郎の行衛を重兵衛に尋ねるが、重兵衛は股五郎に恩を受けた義理を思ふて容易に打明けな。平作は遂に腹を切つて、死んで行く身に聞かしてくれと頼む。義理と恩愛の斷末魔に迫つた重兵衛は鍔陰に忍んだ、お米と池添孫八に聞かすやう「股五郎の落つく先は九州相良、吉田で逢ふたと人の噂」と云ふ。平作と重兵衛は相抱いて親子の名乗り、死に行く名残りに泣き入る。雨は一しきり降りつゞいて平作は落入る。

(佐和利) 沼津里の段

私故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負ひ、一旦本腹有つたれど、此頃は頻りに痛み、色々介抱盡せども効無く、立寄る方も旅の空、此近所で御養生、長しい間に路銀も盡き、其貢に身の廻り、櫛笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺も、男の病ひが治したさ、先程のお咄しに、金銀づくでは無いとの噂、燈火の消えしより、あの妙薬をど

竹本住太夫の代々

うがなと、思ひ着しが身の因果、どうぞお慈悲に是申、
 今宵の事は此場切、お年寄られしお前に迄、苦勞をかけ
 し不孝の罪、けふは死なうか翌の夜は、我身の瀬川に身
 を投げんと、思ひし事は幾度か、死んだあとでもお前の
 歎きと一日ぐらしに日を送る、どうぞ御慈悲に御了簡と
 東育ちの張もぬけ、戀の意氣地に身を碎く、心ぞ思ひや
 られたり。

◇初 代——天明三年（二四四三）

大阪の人、明和四年江戸に下り大立物となる。文化
 七年三月歿。

◇二 代——年代不詳

江戸の人、初め竹本祖太夫と稱し、後二代目を襲ぐ

◇三 代——天保二年正月（二四九一）

江戸の人、初め和太夫後竹本高麗太夫となり、天保
 二年三代目を襲名。晩年五代目竹本内匠太夫となる

◇四 代——萬延元年正月（二五二〇）

大阪の人、長門太夫の門人竹本田喜太夫が襲ぐ。

◇四 代——文久二年（二五二二）

竹本攝津大椽が未だ越路太夫として江戸で修業時代
 に一時四代目住太夫を名乗る。文久三年六月大阪へ
 戻るに及び元の越路太夫となる。

◇五 代——明治卅一年（二五五八）

大阪の人、初め竹本雛太夫後竹本越太夫となり（明
 治十八年）明治卅一年五代目を繼ぐ（昭和十六年九
 月廿二日がその卅三回忌に當る）

◇六 代——昭和十六年九月（二六〇一）

十一才の時三代目越路太夫が未ださの太夫時代に其
 弟子となり竹本小常太夫を名乗り、後明治卅六年二
 代目常子太夫、大正四年竹本八十太夫、大正十四年
 竹本文字太夫と改名、此度六代目住太夫を繼ぐ。

本曲は伯耆の豪族名和長年とその一族が船上に義旗を上げるまでの模様を描いたもので、此度初めて舞臺に上る事になつた新作淨瑠璃。作者は紫紅山人、作曲は鶴澤重造が當つてゐます。

(床本) 名和長年 (大阪湊の段)

如月や、春とは云へど風寒き、夜半の嵐も今朝風ぎて岸邊にもやふ一つ船、しとどに濡れし其苦に、渡海の艱苦ぞ偲ばるゝ、船端傳ひよろゝと走り上りし磯の上、堪らへ堪らへし無念の涙、暫し詞もなかりしが、ア、我れながら不念なり、未だ明けやらぬ薄暗がり、水を汲めよと申し付け、船子一人遣はせしが、餘り歸船の時移るに訝かしく存ずる折、楫取りの申すやう、拙者捜しに參らんと申すに任せ何心なく許せしが、扱は兩人心を合せ御船を振り捨て落ち延びしか、但しは敵に内通せしか心許なし、追ツついで召捕り呉れんと老足を踏みしめゝ驅け出す。追ふな堯心暫し待てと苦押し分けて、靜々と立出で給ふ少將忠顯、此方はハツと振り返り、仰せにはござりませぬど萬一内通致しなば、以ての外の御大事、イヤトヨ堯心某つらゝ考ふるに、彼者尋常一様の男、

さまで惡意のある者ならず、空腹を満たしなば忠義の道も分りつらむ、鳥を出でゝ早や六日、憂さと辛らさに堪かねて、食を求めの業ならん、心な置きそ静まれと、慰め給へば堯心は、エ、情けなき世の中や、如何に時運非なればとて、賤しき水子にも見捨てられ、此有様は何事ぞ、テモ口惜しき次第やと、握る拳に雨やさめ岩根に生ひし瘦松の村雨に會ふ姿なり。ホ、う感慨もとより理りなれば隱岐の判官兄弟も君に弓をば引きしぞや、天が下をば知ろしめす御身に苦難のかゝらせ給ふ御痛しさよ、と斗りにて互ひに手を取り泣き居しが、漸々涙押し止め、ア、不覺なり、歎きて甲斐なし君鳥を出でさせ給ひ、出雲の判官野波の地頭を頼まれしも心賤しき彼等の奸邪、取り付く濱も六日の波上、敵の眼を恐れつゝ魔風と戦ひ波濤を越へ、幾干の辛苦今爰に寄る邊なき身の哀れさよせめて頼みとなる者のあるべき方ぞ戀しやと、直衣の袖を絞らるゝ、成田堯心堪り兼ね、其御仰せのやる瀬なさせめてゝも此堯心、人並みの力あらば身を碎きても盡さんにあるに甲斐なき此老骨、力と頼む富士名殿金吾殿にも引別れ、船子楫取りにさへ侮らるゝ不甲斐なき、御

身と予とのたゞ二人、君をば何と護られう、力足らわぬ
さすらへ人、思案してたゞ少將殿ム、たゞ此上は君が
豫ての思し寄り名和の莊の地頭又太郎長年を味方に乞ふ
より途なからんコリヤ堯心其方直ぐに參るべしと仰を聞
くより、エ、ナ、何と御意なされます、某如き老ぼれ
には餘りに重き御役目、仕畢ふす事存じも寄らず、平に
くくと身を振ふ、少將キツト詞を正し、コリヤ堯心せつ
ば詰りし君の御爲め、六かし、イヤ大役なりと此期の辭
退卑怯であるうぞ、イ、ヤ卑怯者との御叱りは御尤もで
はござりませれど、此儀はお赦し下されかし、ハツ心得
ぬ日頃に似合わぬ其方がさま、仔細ぞあらむ、サ如何じ
や、ハ、イ數ならぬ私に分に過ぎたる大事の御役目、有
難しとも勿體なしとも申すやうもござらねど、若し仕損
じなば一大事、お使ひの旨申述べ長年領承致せばよけれ
ど、淺ましき世の習ひ、六波羅鎌倉へ心を寄せ、堯心が
細首刎ねるや否手勢引具し寄せんも知れず、それを思へ
ば忠義却つて不忠の謗り、捨つる命は惜しまねど、長年
を説き伏せんには身の輕さ、器量のなき力のなきを顧み
て、お受け致さぬ我が心底、イ、ヤ小三郎、常日頃より

の其方が思慮辯才、中々人の及ばぬ所、よしや餘人のあ
ればとて、其方ならで叶ふまじ、イヤく某には逆もく、
ムン然らば得參らぬと申すか任重くして力足らずと辭退
する其方頼みて甲斐なし、予が參る、コリヤ其方キツト
君をば守護申し御安泰におわさせよ、エ、それは又いよ
く身に餘る大任、然らば名和へのお使ひ致すか、サア
くくと退引ならぬ主命に思はずわつと泣き倒れ、エ
、腑甲斐なき此堯心、身は下總の成田が一族、弓矢取り
には生れしが生來の虛弱者、ひそかに名利の思ひを省き
我が世清しく過ぎ來しに、六十路に餘りし今日只今初め
て吾が才、吾が力の足らざる事を覺りしぞ、名和へ行き
ても覺束なく、君の御守護も猶難し、思へば弱き此身や
と、頭をむしり腕を打ち、悔み涙ぞ是非もなき、少將詞
を荒らげ給ひ、エ、才力斗りが事を成さんや、堯心とも
ある者が無益の繰言聞苦しいア、コレあれを聞け、御船
よりの御催告勅説なるぞ、成田堯心、ハアハア勅説畏り
奉る。オ、領承致せしか、満足く、早々行けと勵ます
聲、ハハハツと斗りに立上り、急ぐ二足三足目は、重き
役目に鈍り勝ち、名和とは云へど測られぬ、心の底の奥

深き、唯此上は皺腹を切て命の綱を斷ち、惡鬼となりても引連れん、覺悟も今は成田堯心、磯邊の岩のそれより固き心に誓ひつゝ、足を早めて。

第二場 名和館の段

名和の又太郎に對面せん、長年殿、エ、茲な老ぼれ奴、御主人の名を呼び捨てに中門迄も踏み込む奴、一體おのれは氣狂ひか、イ、ヤ氣も狂わぬ名和殿にお目にかゝり度い會ひ度い、放せと呼われれば、得體の知れぬ其老人、早く門外へ引出しおろう。早くと引立つる。ヤア、卒示の振舞暫し、名和又太郎長年之にあり、我が名を呼びし老人に對面せんと出で給へば、人々ハット頭を下げ、敬ひ恭じ奉る。長年左右を顧みて、方々には不興氣に思さんも、名を呼ばれて會わぬも却て卑怯の誘り、其者是へ此長年に會わんといふ汝は何者何處の者、オ、長年殿とはお身なるか、ヤレ、嬉しや某は都方の醫師、お咎めはさる事ながら御名を慕ひ参りし者、至急のお願ひ心せき慮外の段は幾重にも、フウム都方の醫師とな、シテ至急の願ひとは何事なるやとありけれど、邊り憚りためらひて出す詞はなかりけり、血氣の近清立上り、コリヤ大殿様の御尋ね何故返答致さぬぞ、

不屈者奴ときめ付くれば、見らるゝ通りの瘦老爺長年殿には恐しいか、雜輩の取扱ひ嚴しく、今某が申す事一期の御大事にござれば、お人拂ひの上お聞き下され一重に願ひ奉る、ナント人拂ひして聞けとや、如何にも絹のなへたるも珠を包むの譬へ、人賤しくも言葉高き事あり今某が申さんとする事地上に立つて云ふべき卑陋の節と事變る、御免あれ、方々と座に上らんとしければ、義眞慌て押し隔て、エ、コ、ナ無禮者、推參至極と留むれば、イヤ待て兩人、先刻よりの詞の端々、人品骨柄見處聞處なきにあらず、何事の密事一應聞かん、コリヤ近清其方共は退けよと、仰せ畏み近清は御前を下り出で、行く、ア、扱はお聞き下さるか、ア、有難い忝けないと堯心嬉しきこわさ老の足、よるめき乍ら漸々と登る階段三つ五つ、長年席を改めて、田舎育ちの武骨武士、名和又太郎承らむ、心置きなく語られよと物やわからかに尋ねられ、忝うはござれども假初ならぬ御大事、只々お人拂ひの程願はしう存ずると云ふを打消し、ア、イヤ遠ざくる程の者一人もござらぬ、皆此者は某が縁者一族、互ひに一心同體にて隔てのなきが名和の家風、一大事とある

からは猶々以て一族と俱にうかがひ申さんと理義當然の
言舌に、甚長、義行、義眞も顔見合わしてほゝえみぬ、
長年重ねて鞘を拂ふては刀の折れる迄、又詞を出しては
身の罪なわるゝ迄とこそ申す貴殿の顔色、言葉の端、唯
事ならずと思わるゝ、然るに他聞を憚り憶せらるゝは才
學ある客人にも似合わぬ仕儀、某のみに聞かせて、人々
に聞かせじと思わるゝ程の密事ならば又太郎も承はり度
くはござらぬ、ア、人騒がせな興がる老人疾くゝ立て
歸られよと、鋭き詞に、ア、成程あやまつたり隔てを置
かぬ一心同體の方々とあるからは過言お赦しを蒙り、此
賤しき瘦老人、逆も方々のお力に足らぬは云ふに及ばぬ
處今某が申す事お心に染まざる時は此細首を捻ぢるとも
勿ねる共、只々お聞き下されて申終つた其後はいか様共
お心儘かせと腰刀投げ出し、眞實面にて顯せば、ホ、ウ
氣遣ひあるな例へ無禮のありとても申す詞は盡させん、
疾くゝ語れ、サア云へ聞かんと長年初め人々は勵まし
乍ら興がりて片唾を呑んで聞き居たる、覺悟極めて居乍
ら、もひるむ心を取直し膝を正して聲を上げ、如何に名
和殿我が日の本は君臣一家神代の昔其儘に、君は君たり

又臣は根を同じうして枝を分け、世に美はしき國の御姿
殊更名和の御家は村上源氏と承はる勿體なくも村上天皇
第六の皇子具平親王の御末にてはあらざるや、ム、ム、
如何にも客人には能く御存じ、即ち具平親王十一代の後
胤馬但の禪師行盛が孫こそ斯く申す又太郎長年にて候へ
ヲ、扱は御身の祖父行盛は承久の昔君にお味方、鎌倉勢
と戦ひし二方二郎行明が子ならずや、ハテも詳しくも御
存知よなサア其二方二郎は北條と戦ひしが戦ひ利あらず
屋敷十七ヶ所を失ひてもちつとも悔まぬ忠義の武士、其
子孫としての長年殿は何んと北風寒く日月の光りも暗き
今の世を何と思し召しますぞ、コレそれでも心に愧ぢ給
わぬか、村上源氏の流れの末か、家柄といひ、器量と云
ひ、天晴れ頼母しげの大丈夫も、心が二途に亘ればこそ
口に一言もなきことか、某如きは只これ匹夫のあるに甲
斐なき身なれども、つくゝ世の有様を打眺め、君の御
上を思ひ奉れば、浮世の波の荒れ狂ひ、御心にもなき隠
岐の島守、朝雲には御愁ひたなびき、夜の雨には御涙の
誘ひて御口惜しき朝夕を藻汐の草のそれよりも濕り勝ち
なる汐曇り、晴れさせ申す輩もなく、隨ふ者は力なき干

瀉に残るうろくづの、焦り〜つ命さへ儂き夢の沖津波、寄る邊なき身の捨小舟、斯く申す堯心は鶉縛る力さへ覺束なき身なれども、君の御爲めには身は鴻毛の輕きに譬へんものと存するに、行明殿の正統たる長年殿の世知らず顔ぞ恨みなれと、或は慨き或は怒り、悲憤の涙ハラ〜と膝に淵なす計りなり、聞く長年は堯心が至誠の金言肝に徹し、さしうつむいてあたりしが、漸々に面を上げ、此又太郎に何とせよとて左様の事を云わるゝぞ、御身一個の御存念にてはよもあらず、察する處隱岐の君のヤ、サア隱岐の君の御爲めに此長年を説かるゝものと存じたり、先程よりの一言一句、そも御身は何處何人より遣はされし、唯明らか申されよと、大事を見抜く名將の詞に、堯心思はずもコハ驚き入たる御賢察、今は何をか包むべき、誠は〜と云ひ淀みしが一期の勇氣、儼然と六條忠顯卿の旨を受け、勅諭蒙つて成田堯心これへ參じ向ふたり、隱岐の帝の勅諭なるぞ、聞くより一同仰天しハ、ハ、ハ、ハ、ハ、アと身をへり下り平伏す堯心威儀を繕ひて名和又太郎以下謹しんで承はれ、申すも畏れ多けれど、君隱岐の島を潜かに免れさせ給ひ海陸の御難逆臣の虎口危ふく御まぬがれあつて伯耆大阪の湊へ御着船然る所君には深く御身が人となりを聞し召し給ひてヤ

又太郎こそは必頼まれ參らせん、兎にも角にも御迎ひに參れとの勅諭、サ名和又太郎長年何と承はる、サ如何にぞと事成らずんば死せんものと小刀の柄握りしめ、兩の眼は血走りて火を吐く如く見へにけり、長年謹み身を退り、熱き臉をしばたゝき、ハハア忝くも一天の大君の有難き勅諭を蒙りながら、いかで仔細の候べき、縦へ千度萬度身を滅し、命を失ひ候ともなぞか辭し申べき、君の御爲め國の爲め、本望とこそ存じ申す、お心安く思されそ、ナ、ナニ長年殿には確と領承か、ハ、勅命の趣長年謹んで領承仕る、ア、有難し忝なし、君御萬歲御運開けん、ア、嬉しや忝けなやと張りし心も抜け切れて嬉し涙ぞ道理なる。長年は突立上り、事急なれば汝等は互ひに一致協力し兵備糧食手落ちなく萬事の用意致すべし、我々は直様御迎へ、義真來れと呼はつて一間こそは入り給ふ、後につゞいて一同は君臣一家父子同體弓矢の誓れと勇み立ち物の具にこそ身を固め、やがて曳き出す大鹿毛や、栗毛の胸のたくましき、長年ゆらりと打跨り、ヤア〜甚長程近からぬ船上山御道筋に心をつけ、假りの宮居は智積寺と畏れあれ共定めしぞ、成田殿には今暫し疲れを休め給へかし、イヤ〜寸時も許せぬ御迎へ我れも諸共急がんと馬上を見上げて、テモ扱も幸先き目

出度其鎧褐色なるぞ面白し、往昔神武の大帝賊を平らげ給ひてし、其時弓はずに輝きし金鷄も鳶の類ひかや、それに囚める勝鎧稜威顯はす兆ぞや、ホウくく君の仰せを畏みて馬乗り出す此長年、鳥見の山にあらね共かねて堅固の船上山、其要害に立籠り、日頃鍊へし強弓の矢の根の錆と朝敵を打滅して千代八千代、君ケ代護り奉らん、いざく共にと鞭を上げ涙をさして

「名和長年」 作者の言葉

紫 紅 山 人

建武中興の大業に際して盡忠の至誠を臻した忠臣の中楠、新田などは淨曲化せられて既に幾久しい、然るに名和長年に就ては由來淨曲化せられたもの絶無である事を常に遺憾に思つてゐた私は、數年前幸田露伴先生作戯曲名和長年を讀んで、深い感銘を興へられ、爾來民心作興の一助にもと之れが淨曲化に専念しつゝあつたが、時恰も光輝ある紀元二千六百年に際會し、愈々其作詞の完成を急ぎ、稿成るや、幸田露伴先生の御聽許を得た事は私の最も光榮とする處である。何分行文不備且又上演時間の制限などの爲、其文章をカットした結果、讀む上に於ては意の滿たざる譯も多々あるが、これを太夫、三味線

人形の綜合藝術に依つて表現せられた場合、多少其欠陥を償ひ得るものと思ふ。猶作詞に就ては、大日本史、名和長年記などを參考としたが、大體は幸田露伴先生の戯曲名和長年に據る。唯淺學不文の爲め先生金玉の文字を泥土に委するの罪淺からざるを懼るゝのみである。

豫 告

當座は目下場内の修理と清掃に従事致し居候處竣工の上は上方歌舞伎にとつて、最も古き傳統をもてる當座を選び、來る十月中村翫雀襲名披露興行を開演可致目下準備中に有之候間開場の曉は何卒舊に倍して御聲援御引立を賜り度右豫告仕候也

昭和十六年九月

道 頓 堀

角

座

敬 白

廓 嘶 の 段



浪花次郎作
吾妻與四郎

浪 吾 禿
花 妻
次 與 人
郎 四 形
作 郎 役

吉 桐 桐 割	豊 鶴 鶴 鶴 豊 豊 鶴 豊 豊	竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹
田 竹 竹	澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤	本 本 本 本 本 本 本 本
紋 十	仙 叶 德 一 仙 廣 友 廣 新 呂 和 角 叶	太 太 太 太 太 太 太 太
玉 政 十	右 三 十	太 太 太 太 太 太 太 太
藏 龜 郎	糸 若 門 郎 二 郎 助 門 夫 夫 夫 夫	夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫



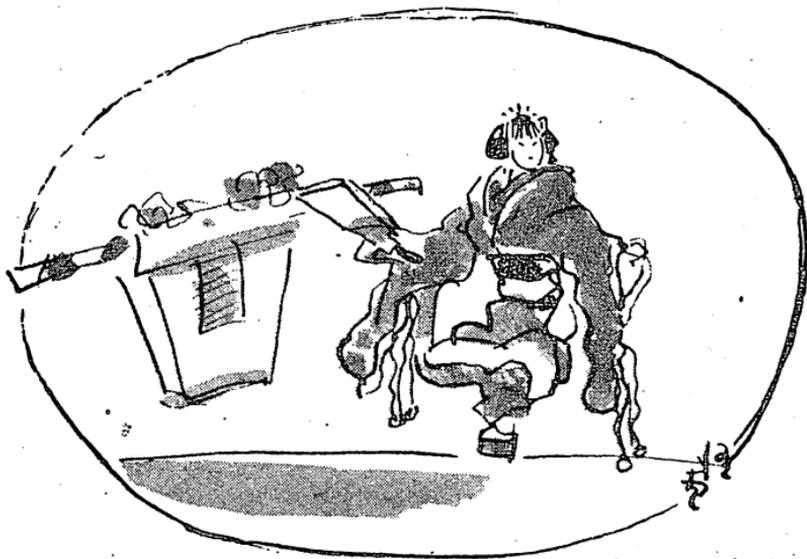
戻り
駕
色
相
肩

廓 嘶 の 段

櫻に霞む朱雀野を遙かに見渡した洛陽紫野あたり、吾妻の與四郎と浪花の次郎作とが四手駕を下して互にお國自慢から廓話になり、駕の客なる禿を呼び出せば、谷の戸開けて鶯のまだ廓馴れぬ風情で禿が駕から現はれ、禿を相手に三人が廓話に華を咲かすといふ趣向。

(床本) 廓 嘶 の 段

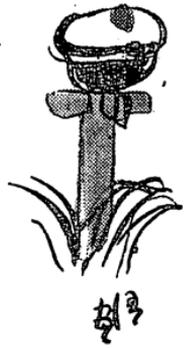
あら玉の年の三年を待ち侘びて待たるゝ顔にまつかほを、合せかゞみのふとんさえ、色でもてるか四ツ手かご花が人呼ぶうは氣の花が、月に浮かるゝうは氣な月に、うきにうかるゝ月花に、おれ込じや、合點じや、かた山じや、合點じや。下戸は酒手ではぎの花、呑込んだ、様はなる口こちや色上戸、もみじも風にやつしごとと拍手取々來りける、ヘエン、罷り出でたる者は吾妻の與四郎と申す駕かきにて候、ヘエン、罷り出でたる者は浪花の次郎作と申すゑらい駕かきにて候、ア、コレ〜なんぼお



ぬしが浪花〜と云つても、江戸の様な事は有るまい。
 イヤ何ぼこな様がそういはんしても、江戸は又大阪のや
 うな、揚屋はごぞんずまい、ア、中の町のとうろうが見
 たいわい、そんなら住吉、天満、高津登りの様な面白い
 二〇加は有るまい、事も悪や、御殿山、飛鳥山、上野の
 様な櫻は有か、ヤこいつは一番あやまつた、へ、んちつ
 とそふ有るまいかハ、何と役にも立ぬ事をいかいた
 わけだわい、時に棒組、あの山々の景色を見やれ、ドレ
 成程、ア、よい景色だわい、あれを詠めてさらば一
 服、致さうかい、ふりさけ見れば雪ならでおのが羽こぼ
 す白鳩や、雲の煙草の薄煙、輪に成梅に鶯の、またさゝ
 なぎの摺火打、石よりかたいかた棒組に、角のとれたる
 息杖は、五枚銀杏に三ツ銀杏、よい相肩の辰駕、何と次
 郎作おいらがのせて来た振袖は、何で有ふナ、あれは島
 原の傾城、小車太夫の禿さ、そんなら爰へ呼出して廓の
 咄を聞ふぢや有まいか、是はよかるふ、サア〜姉さん
 爰へ出さんせ〜、アイ谷の戸あけて鶯の、まだ、里な
 れぬ風情にて、おもはゆげなるその姿、申し爰は何とい
 ふ所でござんすへ、爰は紫野といふ所さ、そんなら爰は

紫野といふ所かへ、そうだく、時に姉様、何と島原の廓の咄を聞かせる氣はないか、コレそのかはりおれも又江戸の吉原の咄を聞かせる、コレ棒組、おぬしも新町の咄をする氣はないか、どうだく、そふいへばおれも又新町で花をやつた者よ、此駕舁に引かへて、紋日特日の出立は、腰巻羽織ひとつまへ、よしや男の丹前姿やりかけくはんくはつ出立、ア、見せたいわい、つうで有ふよ、迎もの事に其咄が聞たいわい、成程咄して聞そうがかんじんの羽織がない、爰にお大盡の羽織が有はいなヤコレハ幸、シタガ羽織があつても、大小がないわい、ヲツトそこらは合點と、息杖取つて差出せば、是も新し風俗と、其儘取つて掴み差、又古に立歸りふつてふり出す花吹雪、振出すく花の雪よの、こしまき羽織くもの帯、上の町ドツコイ、下の丁ドツコイ、中のく中の丁さまにこがれて柴船の香り床しき一ツまへどつとほめて通した、遠東の男山ヨイコラ、どつこい、ヨイヤナサアくく是から江戸の吉原の咄、與四郎所望く、先おれがぬれ事といふは、江戸町でなし、二丁目でなし、恥しながらへ、小店でしやれてアリヤくくヨイサ、お

くと女郎衆はなぜにふりやんすく雨か雪かとぬれてしつぱり、しめて寝た夜はひげくくくをば引れた、ヤコレひげをば引れた、きつく引れてサア目がさめた、三五夜なかにまん丸顔でナしやれた姿の赤前垂が、ソレくく袖を引れた、朝は戀なら枕はしない、まくらはせじとよふ言ふた、そりやこそお立じやく小氣味よい程きふく引かける、扱も身につく吸付たばこ名残おしくもせき立られて駕をかたげて急ぎける、サアくくおれが咄は是で仕舞だ、是から姉さんの番、何ぞ面白い咄所望だく、そんなら私も里の咄、恥しながら咄しませふ、花よくとかねやる客は、しんぞふり出す八文字、すかん男は皆すかんびん、蓼喰ふ虫も逢馴染て身に泌み渡る淵瀬川、戀はさまく有が中にわけて戀路は逢戀待戀忍ぶ戀、我戀は必ず今宵も合點か、合點くそなたも合點我等も合點あい圖の手くばた吞込んだ、エイくえいやと手を打、鳴は夜明の鐘の音、踊り戯れ諸共に、かしこをさして歸りけれ。



八幡里引窓の段

人形役 割

三原傳造	平岡丹平	濡髮長五郎	與兵衛母	女房お早	南方十次兵衛
吉田光之助	吉田文作	吉田玉幸	吉田小兵吉	吉田文五郎	吉田榮三

中切
 鶴澤清六
 豐竹古靱太夫
 豐澤仙太糸
 鶴澤呂太夫
 豐澤和泉太夫

双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

本曲は寛延二年七月(二四〇九)竹本座上場。竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作で全九段からなる。大阪の關取濡髮長五郎は舊主山崎與五郎とその戀人吾妻の爲に盡し、遂に平岡三原等の武士を殺すはめになる。長五郎と仲の悪るかつた放駒長吉は妹お關の意見で長五郎と和解し、長五郎を河内の母方へ落とす。長五郎の母の義理の忤南與兵衛(南方十次兵衛)は捕手の役人だったが、母の心を察して、長五郎を逃すと云ふ筋で、かの近松作「壽の門松」(享保三年正月||二三七八||竹本座上場)と西澤一風、田中千柳合作「昔米萬石通」(享保十年正月||二三八五||豊竹座上場)とを併せて趣向を立てたもの。尙、第二相撲の場、第四米屋の場、第六橋本の場と共にこの第八引窓の場が有名である。

梗概

當時浪華に知られた關取に、濡髮の長五郎と云

ふのが居たが、長五郎はかね／＼山崎與次兵衛に
は一ト方ならぬ恩誼をうけてゐたので、その若旦那
那與五郎が、藤屋の吾妻を身請けするに就いては
双肌ぬいで奔走を續けてゐた。

處が吾妻には、郷右衛門と云ふ武士も執心で、
此の方にも身請け話を持ち上つてゐたが、それ
は放駒の長吉と云ふ關取が肩を入れてゐた。

折も折、土俵の顔合せが濡髪と放駒と云ふこと
になつた。互ひに人氣相撲のこととて、双方の最
眞の聲援はもの凄く、小屋も割れんばかりの盛況
であつたが、此の晴の勝負に濡髪は、態と相撲を
振つてやつたのだ。それは云ふまでもなく、吾妻
のことを放駒に宜しく頼みたい爲であつた。

だが、勝ち誇つた放駒は、一向そ知らぬ顔であ
るのだ。二人の間は喧嘩になつて、遂には茶碗の
礫が飛んだ。

性來喧嘩好きの放駒は、茶碗のかたをつけると
云つて、濡髪を我が家へ呼び寄せて喧嘩をしかけ

たが、放駒の喧嘩好きを心配してゐる姉のお關は
講中の衆を頼んで長吉に盗人の汚名をつけ、不心
得を意見した。

又長五郎も、共々意見をするので、始めて長吉
の心も和ぎ、此處に濡髪と放駒は、目出度く和解
して、改めて腕の血をすすり合ふ仲になつた。

その後濡髪の長五郎はフトしたことから廓で人
を殺め、お尋ね者となつて落ちて行つた先は八幡
村の南與兵衛方——今は侍に取り立てられて、南
方十次兵衛と名乗る其家だつた。

與兵衛の義理の母お幸は長五郎の實母なのだ。

苗字帯刀まで許され、村方の取締をする與兵衛
は、既に人相書まで廻てゐる此の長五郎を召し捕
れば大手柄になる。然し母の心を察しては義理あ
る兄弟に無下にも繩はかけられない。とは云へ、
暮六つ過ぎれば與兵衛の役目はどうしても長五郎

を見逃しには出来ない。與兵衛の女房お早も夫の心をそれと知つて、引き窓を明けては態々未だ日が高いと云ふ。與兵衛もそれとなく河内への拔道を教へて長五郎を落してやらうとする。

一方、これも義理にせめられる長五郎は、堪り兼ねて與兵衛の繩にかゝらうとするが、流石は肉身、母は彼の前髪を剃落し、姿を變へて逃さうとする。

折柄、與兵衛が打つた錢の磔が長五郎の高頬の黒子を落した——是も人相を變へさせて義理ある兄弟を助けん爲めの與兵衛の情に他ならない。

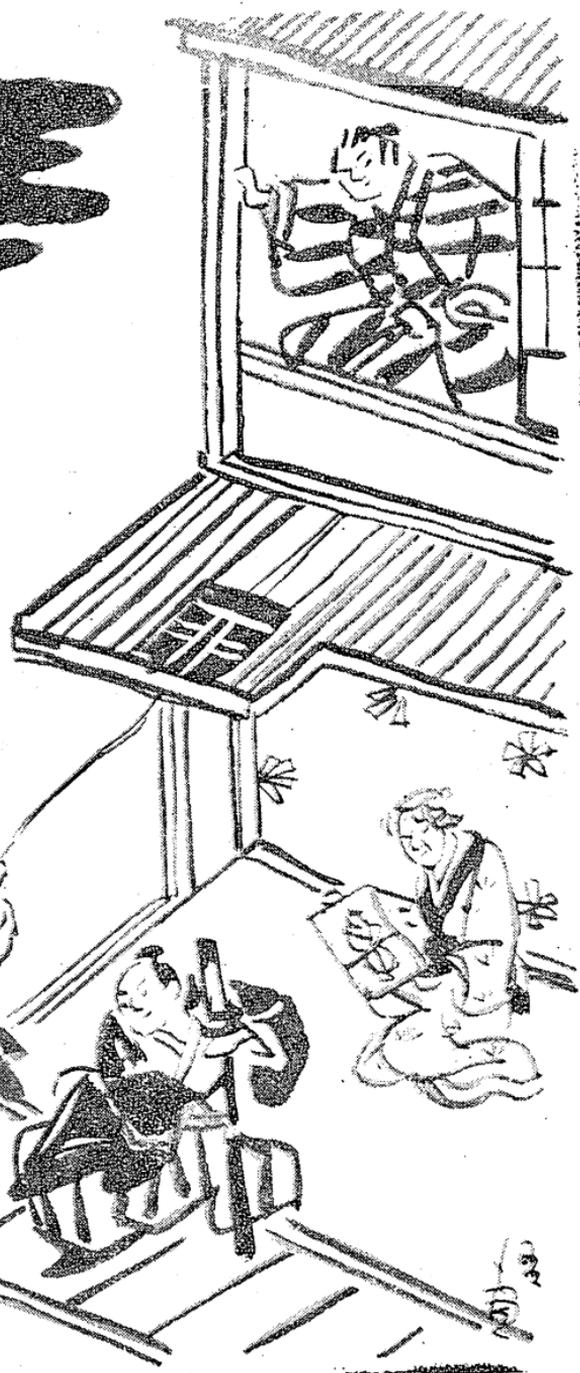
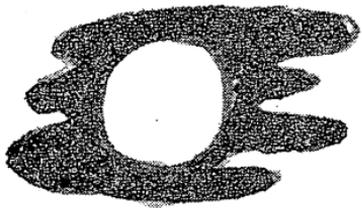
長五郎も母も、今は與兵衛の役目を全うせしむるのが人の道と覺悟を決めるが、引窓から差し込む晝の様な明るい月の光に

「夜が明けた、身共が役は夜の内許り——」と、與兵衛は長五郎を逃すのだつた……………」。

(床本) 引窓の段(切)

人の出世は時知れず、見出しに預り南與兵衛、衣類大

小申し請け、伴ふ武士は何者か、所目馴れぬ血氣の兩人、家來も其の身も立ち止り、ヤ是れが貴公の御宿所とな、イザ御案内、お先へと互に辭儀合、南與兵衛いそくとして内へ入り、母者人女房、只今歸つた、ヤアお歸りか戻りやつたか、お上の首尾は如何ぢやの、お悦びなされ極上々、マア嬉しい、即ち此の如く衣類大小下し置かれ名も十次兵衛と親の名に改め下され、昔の通り庄屋代官を仰せ付けられ、七ヶ村の支配、ヤレ、夫れは目出たい事、見れば表にお歴々が見えるが有りや何様ぞ、あれは西國方のお侍密々に仰せ合はさるゝ事有て御同道さして隠す程の事ではなけれど、暫く母人も御遠慮、女房も用事あるまで差控へよと、云ひ渡し、表へ出づれば嫁姑、今からは武士附合、遠慮が多いと物馴れし、母と嫁とは立ち別れ奥と口とへ入りにけり。イザお通りと兩人の、武士を上座へ押直し、今日殿の御前にて仰せ付けられし竊かの御用、仔細は各々方に承れとの儀先づ其のお尋ね者の科の様子、お物語、と尋ねれば、年長なる侍取敢へず拙者は平岡丹平、是れなるは三原傳藏と申して主人の名はお上にもよつく御存じ、當春大阪表にて、兩



此処豊竹古藪木文

花勤申状

人の同苗共を殺され方々と詮議致せど、討つたる相手行方知れず、此の間承はれば此の八幡近在に由縁あつて立ち越えたと申す。さるによつて當役所へお頼み申せしに兄弟の敵隨分見付け召捕られよ、しかし夜に入つては當地不案内、所に馴れたる者に申し付け、繩かけ渡さんと有つてナソレ貴殿へ仰せ付けられた仔細と申すは斯くの通りと、語るを一間に母親が、耳欲つれば此方には、女房おはやが立聞きの蟲が知らずか胸騒ぎ、與兵衛は何の心も付かず然らば敵討同然隠密く若し左様の儀も有らうかと、母女房まで退け、御内意を承る、なんと其の討たれさつしやつた、御同名のお名はな身が弟は郷左衛門手前が兄は有右衛門アノ平岡郷左衛門三原有右衛門トナいかにも、フムウ、御存じかな、イヤ承つた様にも、ムウ、して其殺したる者は何者、サア其の相手は相撲仲間に隠れもなき、濡髮の長五郎と聞いて母親障子をびつしやり、おはやは運ぶ茶椀をぐわつたり、ハテ不調法など叱る夫の側に座し、猶も様子を聞きゐたる、シテ御兩所は何國を目當、先此の丹平は當所を家捜し致したい、御尤もく傳藏殿には思召し寄りは何と、手前が存ずるに

は最前其許へお頼み申した繪姿を村々へくばり置き、油斷の體に見せ、どかくと踏込み牛部屋柴部屋、或はコウ二階などを吟味致したい、とへムム夫れも尤もア、大きな體、下家にはをりますまい、兎に角二階が心元ない、先づ御兩所は楠葉橋本の邊を御詮議なされ、夜に入らば拙者が受取り、假令相撲取でござらうが、柔術取でござらうが、見付け次第に繩打つてお渡し申さん、其の段そつとも、ヤレノ其の詞を聞いて安堵々々、イヤ丹平殿楠葉邊へ參らうか、いか様日の内は隨分我々働き、夜に入つてお頼み申すが肝心、早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう、エ、左様々々と目禮し、二人の武士は立ち歸る。おはやは始終物案じ差俯向いてゐたりしが申し與兵衛様味なことを頼まれなされ、長五郎とやらを捕つて出そとの請合は、夫りやマアお前ほんの氣かえ、ハテ氣疎いものゝいひやう、あの侍に由縁もなく、元より長五郎に意趣もなければ、いまの兩人が願ひによつてお上より此の與兵衛に仰せ付けられた、其の仔細は、彼關口流の一手も覚え居る事お聞き及びあつて、イヤナニ役人共に申し付ける筈なれども、當所へ來て間もなく不

案内、住み馴れた其方に申し付くる、日の内はあの方より詮議せん、夜に入つては、此方より隅々まで詮議し、なにとぞ搦め捕つて渡せ、國の譽と有つてのお頼み、イヤモ一生の外分、召捕つて手柄の程を見せたらば母人にも嘸お悦び、イエ〜、何の夫れがお嬉しかろうぞナゼ、ハテ昔はともあれ、昨日今日までは、八幡の町の町人、生兵法大疵の基と、ひよつとお怪我でもなされた時は、お袋様の悲しみ何のお悦びでござんせう、イヤいらざる女のさし出わりや手柄の先を折るか、ハテ折るも一つはお前の爲、ヤア此奴が何で濡髪をかばひだて、但しはおのれが一門か何にもせよ御前で請合ひ、見出しに逢うた此の與兵衛、今までとは違ふ、詞返さば手は見せぬときつば廻せばヤレ夫婦の争ひ必ず無用と、母は一問を立出で最前からの様子、残らずあれにて聞きました。何と其の濡髪長五郎といふ者、其方能う見知つてか、サレバ一度堀江の相撲で見受け、其の後色里にて一寸の出合、イヤモ隠れもない大前髪、慥か右の高頬に黒痣、見知らぬ者も有らうと有つて、村々へ配る人相書コレ御覽なされと懐中より、出して見せたる姿繪を、どれと見る

母二階より、覗く長五郎手洗鉢水に姿がうつると知らず目ばやき與兵衛が水鏡屹度見付けて見上ぐるを、敏きおはやが引窓びつしやり、内は眞夜と成りにける。ヤアこりや何とする女房ハテ雨もぼろつく、最早日の暮、燈を點して上ませう、ムウはてなあ、面白〜、日が暮れたれば此の與兵衛が役、忍びをるお尋ね者、イデ召捕らんとすつくと立つ、夫れまだ日が高いと引窓ぐわらり、明けていはれぬ女房の、心遣ひぞせつなけれ。母は手箱に嗜みし、銀一包取り出し、是れはコレ御坊へ差上げ永代經を讀んで貰ひ未來を助からうと思ふ大切な銀なれども、手放す心を推量して何と其の繪姿、私に賣つて給らぬか、ムウ母者人二十年以前に御實子を、大阪へ養子に遣はされたと聞いたが、何と其の御子息は今に堅固でござるかな、與兵衛村々へ渡す其の繪姿、何卒買いたい、ハ鳥の粟を拾ふ様に溜めて置かれた其の銀、佛へ上げる布施物を費しても、此繪姿がお買ひなされたいか、未來は奈落へ沈むとも、今の思ひにや替へられぬわいの、へツエ是非もなやと大小投げ出し兩腰差せば十次兵衛、丸腰なれば今まで通りの與兵衛、相變らず八幡の町人、商

人の代物、お望みならば上ませうか、あの賣つて下さるか夫れでは此方の、アイヤ日の内は私が役目ではござりませぬ、ハア、忝や、と戴く母、袖はかわかぬ涙の海、嫁は見る目を押し拭ひ、いや申し與兵衛様、餘り母御様のお心根が痛はしさに、大事の手柄を支へました慥憎い奴不届者とお叱りもあらうが産の子よりも大切に、可愛がつて下さる御恩、せめてはお力にと俱々に隠しました常々からも萬事の品包むと思つて下さんすなと、中に立つ身の切なさを。言譯涙に時移り、哀れ數そふ暮の鐘、隅なき月も待宵の光映れば、ヤ夜に入れば村々を詮議する我が役目、河内へ越ゆる抜道は狐川を左に取り、右へ渡つて山越にくくよもや夫れへは行くまいと、夫れと知らして驅け出づる。情も厚き藪疊、折から月の雲隠れ忍びて様子を窺ひゐる。堪へ兼ねたる長五郎、二階より飛んで下り、表を指して驅け出すを、母は抱き止めコリヤ狼狽者何處へ行く、イヤ最前より尋常に繩掛らうと存じたれども、餘りと申せばお志の有り難さ、眼前歎きを見せませうよりは、此の家を離れてと堪へに堪へてをりませしたが、與兵衛殿の手前もあり、後より追付き捕られる

覺悟、御赦されて、と驅け出すを取つて引き据ゑ、ヤイ茲な物知らずめ、おれ許りか嫁の志、與兵衛の情まで無ししをるか罰當りめ、なきぬ仲の心を疑ひ、繪姿を買はうと言ひ掛けたは、見遁してたまるか給らぬかと、胸の内を聞かう爲、賣つてくれた其の時の嬉しさ、おりや後影を拜んだわいやく、まだ其の上に河内へ越える抜道まで教へてくれた大恩を、何と報じようと思ひをるぞいやい、コリヤヤイ死ぬる許りが男ではないぞよ、七十近い親持つて喧嘩口論、人を殺すといふ様な、不幸な子供が世にあらうか、來ると其の儘缺椀に一膳盛と望んだはおのりや、牢へ入る覺悟ぢやな、夫れが如何見てゐられうぞ、せめて親への孝行に、遁れるだけは遁れてくれコリヤ生きられるだけは生きてたも、何の因果で科人に成つた事ぢや、とどうどふし、前後不覺に泣き叫ぶおはやも俱にせきのぼす、涙押へて、申しく泣いてござる所ぢやないぞえ、夜が明くれば放生會で人立が多い、今宵の内に落す思案何卒姿を變へる仕様はあるまいかいなオ、夫れも心付いて置きました。まあ目に立つ此の大前髪剃りおとしましよドレ剃刀イヤ申し母人、姿を變へて

繩掛らば、よく／＼命が惜しさにと、いはれるも無念な侍を殺した場で、直に相果てようと存じましたが、死なれぬ義理にて生長へ、一日々と親の事が身に染み、ま一度お顔が拜みたさに、お暇乞に參つてかへつて思ひをア、掛けまするわい、イヤ／＼やはり此の儘で與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ、スリアどういうても繩掛る氣ぢやな、覺悟致してをりまする、よいわ勝手にしをれ我より先にと剃刀を、ア、申し誤りました／＼、サアそんなら剃つて落ちてくれと、母が手づから合紙にかゝる思ひがあらうとは、神ならぬ身のしら髪此の身剃るべき髪は剃りもせで、祝うておとす前髪を、涙で揉んで剃り落す、老の拳の定まらず、わな／＼震うて双先がきつくりア申し二所までお顔に疵が、ハアひよんな事しました、幸ひ血止と硯の墨、べつたりつけて顔打眺め大方是で人相が變つたが、肝心の見知りが高頬の黒痣、デエ剃り落さんと剃刀を、當て事は當ながら、是れこそは父御の譲り形見と思へば嫁女、私はどうも剃り難い、此方頼む剃り落して下され、私ぢやとて酷たらしう、夫れが何う剃らるゝ物、是ばかりハお赦しなされて下さり

ませ／＼、ア、思へば思へば親の形見まで剃り落す様になつたか、エ、心からとはいひながら、可愛の物やと取り付いて、わつと計に泣き沈む、折もこそあれ門口より濡髪取つたと打ち付ける、かねの手裏劍高頬にびつしやり、はつと身構へ母は楯、おはやは燈火立ち覆ひ、今は慥か連合の聲、長五郎さん顔の黒痣が潰れたぞえ、ヒヤアほんに眞に是れも情と母親は表を拜みぬたりしが、兼て覺悟の長五郎、思ひ設けてどつかと座し、サア母者人お前のお手で繩を掛け、與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ、コレ長五郎様お前は氣が逆上つたか、取つたと顔へ打ち付けて黒痣を消した連合の心、又此の打ち付けた銀の包に、路銀と書いた一筆、其所へ心が付かぬかえ、サア其の書付も、黒痣を消した心も、骨に徹へ肝に透り、餘り過分忝さに母の歎きも御意見も、不幸の罪も思はれず、不具な子が可愛いと、義理も法も辨へなく、助けたい／＼と母人の御慈悲心、暫くはお心休めと詞に隨ひ、元服まで致したれども、一人ならず二人ならず四人まで殺した科人、ア、助かる筋はござりませぬ。惣かな者の手に掛らうより、形見と思ひ母者人、泣かずとも

繩を掛け、與兵衛殿へ手渡してようお禮を被仰れや、ヤ、コレさうなうては此方、未來の十次兵衛殿へ立ちますまいがの、オ、誤つた長五郎、よういうてくれたな、いか様思へば私は大きな義理知らず、眞をいへば、我が子を捨てても、繼子に手柄さするが人間、畜生の皮被り猫の子を銜へ歩行く様に、隠し遂げうとしたは何事、とても遁れぬ天の網、一世の縁の縛り繩、おはや其の細引でも取て下され、否夫れでは連合の心を無になさるゝと申す物、唐天竺へござつても、此の世にさへござれば如何してなりと、又逢はれる、何かはなしに、落しまして下さんせ、イヤなう一旦匿うたは恩愛、今又繩掛け渡すのはなさぬ仲の義理、晝は護ひ夜るは繩掛け晝夜と分ける繼子本の子、慈悲も立ち義理も立つ、草葉の蔭の親々への言譯、覺悟はよいか、待ち兼ねてをりますると、おはやを取つて突き退け、手を廻すれば母親は幸ひあり合ふ窓の繩、追取つて小手縛り、突き放せば引く繩に、窓はふさがれ心も闇、くらき思ひの聲張り上げ、濡髪長五郎を召取つたぞ十次兵衛は居やらぬか、受取つて手柄にめされと呼ぶ聲に、與兵衛は驅け入りお手柄

左様なうては叶はぬ所、とても遁れぬ科人受取つて御前へ引く、女房どもも何時、されば夜半にもなりまじよか、たはけ者めが七つ半は最前聲いた、時刻が延びると役目が揚る繩先知れぬ、窓の引繩三尺残して切るが古例目分量に是れからとすらりと抜いて縛繩、ずつかり切ればぐわら、指し込む月に南無三寶夜が明けた、身共が役は夜の内計り、明くれば即ち放生會、生けるを放す所の法、恩に被ずとも勝手においやれ、ハ、はツと悦ぶ嫁姑、合はす兩手の數よりも、九つの鐘六つ聞いて殘る三つは母への進上、拙者が命も御自分へ、夫れもいはずとさらば、さらばの暇乞。別れてこそは落ちて行く。



日高川の段

清姫 竹本伊達太夫

船頭 竹本源太夫

ツ 竹本源太夫

竹竹 竹本葉美太夫

レ 竹豊豊 竹本松島太夫

竹本 竹本南次太夫

日高川

日高川の段

この一段は寶曆九年二月(二四一九)大阪竹本座上演の「日高川入相花王」全五段(作者は近松半二、竹田小出雲、竹本三郎兵衛等)の一齣で、安珍を追ふ清姫の執念が蛇體となつて日高川を渡るといふ道成寺傳説を仕組んだもので、後には歌舞伎にも入つてこの日高川の清姫と船頭は人形振りで演ずることが例となつてゐる。

(床本) 日高川

爰は紀の國日高川、清き流れも清姫が胸の炎は夜叉鬼神、靡く柳のつがもなや、遠山寺の鐘の音にとつかは心亂れ雲、つまづきし石も他生の縁のはし、結ばれし身は知る人もなし、しる人は哀れとぞ知る戀のやみ松吹く風に誘はれて、只さへいと物凄し、女心の一筋に、はぎもあらはに漸と日高の川を爰かしこ、安珍様のいふく我夫のふと馳廻り、呼べど叫べど松風の、外に答ふるものなき、早山の端にさし登る、限なき夜半の月影は晝

船 清

人 形 役

頭 姫

桐 竹
紋 十
郎 郎
吉 田
榮 三
郎 郎

割

竹 豊
澤 澤
團 仙
作 松

鶴 鶴
澤 澤
友 鶴
太 太
郎 郎

鶴 豊
澤 澤
友 猿
二
作 郎

鶴 鶴
澤 澤
友 友
平 造

野 澤
勝 平

野 澤
吉 彌

を欺く如くなり、幽に見ゆる川岸の、もやし舟にハア、嬉しや、爰は日高の渡し場、是を越ゆれば道成寺へ間もなし、渡り頼まん急がんと、川の汀に立寄てノウ其舟早ふ渡してたべ渡守どの、いふ、コレの方、と呼ぶ聲も枯野の秋の船ならで渡り乗るぞ甲斐もなき、癡耳にフツト船長は苦押のけて佛頂面エ、何ぢや、やかましいわい、夜夜中がやぐと、早ふ、其聲で、あつたら夢を取逃したわい、夜が明けたらば渡してやらう、エ、コレよふ寝て居る者をあたどんくさいとつこうどに顔をしかめてつぶやけば、ノフ自らは道成寺へ急ぐ者、早ふ爰を渡してたべ、サ早ふ、エ何ぢや、どぜう汁が喰たい、アハ、テモいやらしい奴ぢやわい、ハ、ア聞えたコリヤ何ぢやな、宵に渡した山伏の、跡追ふて来た女ぢやな、エ、それなれば猶渡されぬ、ならぬ、とにべもなき詞に姫は涙聲、エ、ソリヤ、胴慾ぢや、わい、親の許した我夫を他所の女子に寝取られて何とこの儘歸られふ、不便と思ふて渡してたべ、慈悲ぢや情ぢや、聞分てと頼みつ、かこちつ手を合せ歎き沈むぞ哀れなり、こなたは猶も空吹く風、ム、それ程頼む



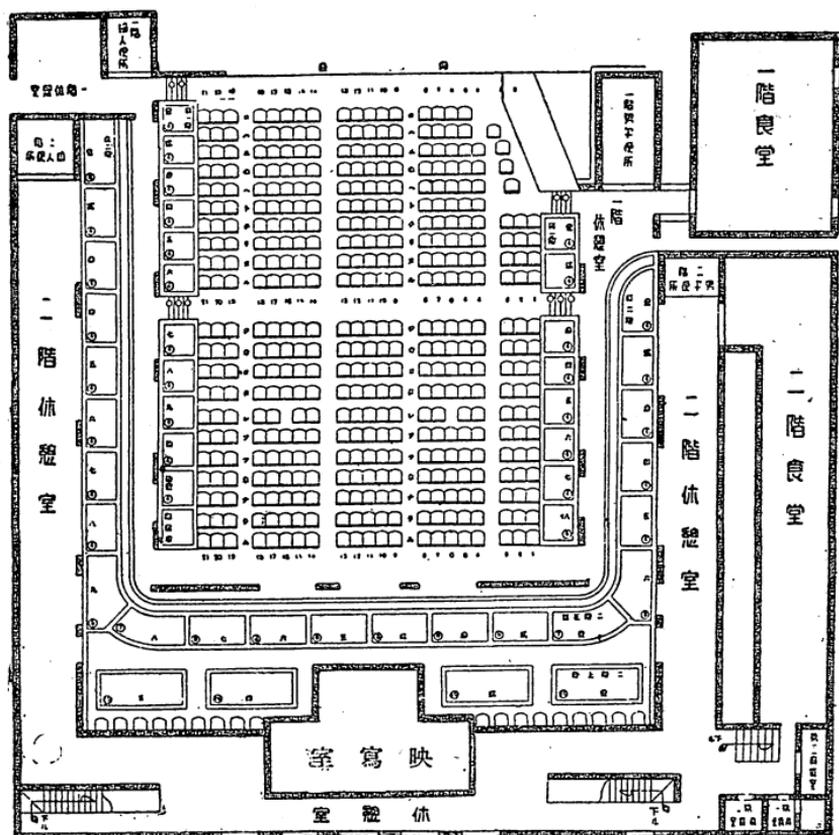
なら渡してやらうと言ふたらよからうがマアいやぢや、
 おりやアノ山伏に縁もなし、又由縁もなければ、渡され
 ぬと言ふ譯を、耳をさらへてよふ聞けよ、われが尋る山
 伏の頼には、様子有て某は道成寺へ逃行者、十六七の女
 が來たら必ず渡して呉れるなとコレこまがねくれて頼ま
 れたれば金の冥利で此川を渡す事はナラヌワイ、寒氣を
 しのぐ山伏の八重か一重か板一枚、下は地獄の此身すぎ
 頼まれたらば男づく、いつかな渡さぬマアならぬ、われ
 もまたどれ程にこがれても及ばぬ戀ぢや、役に立たぬあ
 ごきかずと、足元の明るい内、とつと、いね、エ、
 うぢ、とうぢ付いて掉の馳走を喰らふかと、慈悲も情
 も中々に渡す氣色もなかりける。姫はあるにもあらばこ
 そ、エ、聞えませぬ、安珍様、恨はこつちにある
 物を、かへつて此身に恥かゝされ、何とながらへ居られ
 ふぞいのふ、今日逆も父上の御意見、御尤とは思へ共、
 女は一度我夫と、思ひ込だら魔王でも、譬へ鬼でも變化
 でも、可愛いといふ輪廻は離れず、まして五月の宮詣で
 に、ふつと見染めし其日より、いとし床しい戀しいと言
 夢現にも忘れ兼ね、こがれこがるゝ戀人に逢て嬉しい言

の葉を語らふ聞させ情なや、戀の呵責に碎かれて、身は煩惱につながらるゝ苦蓮の氷、大焦熱、阿鼻修羅地獄へ落る共思ひ切られぬ安珍様、聞えぬわいなと、身をもだへわつと許りに聲をあげ欺く涙の雨車軸、其名も高き紀の國や、日高の川に水増て堤もうがつかくなり、泣目を拂ひすつくと立ち、エ、妬ましや腹立や、思ふ夫を寢取られし、恨みは誰に報ふべき、たとへ此身は川水の底の藻屑と成る逆も、憎くしと思ふ一念の、やわか晴さで置くべきかと、心を定め身繕ひ、川邊に立つより水の面、寫す姿は大蛇の有様、扱は怪氣嫉妬の執着心、邪心、執心彌増り、我れは蛇體と成しよな、最早添はれぬ此身の上、無限奈落へ沈まば沈め、恨を言ふて言ひ破り、取殺さいで置かふかと、怒りのまなじり齒をかみ鳴らし、あたりをにらんで火焰を吹き、岸の蛇籠もどふくと青み切つたる水の面、ざんぶとこそは飛入たり、船長見るよりわななき聲、鬼になつた蛇に成つた、角が生えた毛が生えた、食ひ殺されては叶はじと跡をも見ずして一散に飛ぶが如くに逃て行く、跡に怒りの髮逆立て、不思議や立浪逆まいて憤怒の大頭へ角振り立て、鱗逆立て、くるく怪しかりける次第なり。

文樂座小史(昭和十六年調査)

- 竹本座創立(現今ヨリ二百五十七年以前)
貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)
- 文樂座發祥(現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始め
其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

文樂座御場席案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符。壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座みます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席。三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一

體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐります。

文樂座人形淨瑠璃は 曾に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものでありま

す。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居

りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますか

らお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此

處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と

二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御申附け

下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひ

いたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御

會台席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に

致しました。御一報次第容上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年八月卅一日印刷
昭和十六年九月一日發行

大阪市東區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市西區土佐通二丁目十二
松竹株式會社大阪支店內
發行所 鳥江 鏡也

大阪市西區土佐通二丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所
一部 金二十錢

